



2章 住まいづくりの目的と対応のしかた

住まいづくりの目的として、「人と人との関係を守り育てる」「暮らしの楽しみ」「環境へのやさしさ」「建物の保護」の大きく4つを設定しています。これらの目的を達成するための住まいづくりの配慮点について、関連する要素の事例やその効果等を含めて解説します。

2.1 人と人との関係を守り育てる

人を迎え入れ集う

来訪者を気持ちよく迎え入れる

☞ 植栽 前庭 玄関
格子 建物配置

住まいはその場所に存在している間、様々な人が訪れ、その前を往き来します。住まいを訪れる人が気持ちよさを感じたり、その前を往来する人が落ち着きや安心を感じられるよう、住まいの外観や玄関構え、門塀、垣、庭等のつくり配慮することが大切です。

通りに面する花木や生垣等の「植栽」は、道を行く人の目を楽しませてくれます。開放的で、すこしゆとりのある「前庭」は、近隣の方とおしゃべりの場ともなります。「玄関」は日本の伝統的な習慣である履き替えの場ですが、ここを明るく、ゆとりのある空間とすることで、訪れる人に心地良さを感じさせます。玄関から続くホールに「地窓」を設けて庭の緑が望める

ようにする工夫等も、自然の潤いを感じさせる効果があります。

かつての都市の住まいでは、通りに面して「格子」が設けられていましたが、これは風を通しつつ外部からの視線を制御してプライバシーを確保する工夫です。同時に直線で構成される美しく細やかな意匠は、通りから見て閉鎖的な印象を感じさせません。格子は祭りのとき等には外されて、内が外に開放される使い方もされたようです。閉じて断つ、開いて入れる機能を使い分けるその方法は、身近な他者に配慮しながら暮らす上での知恵の現れと言えるでしょう。



落ち着いたゆとりのある玄関ポーチ、玄関の正面は地窓を通して庭の緑を感じられる（写真：①）

通りから建物までに引きをとり、緑の庭木のあるアプローチをしつらえ、来訪者をお迎えする（写真：①）



京町屋の通りに面した格子は視線の制御と内外のつながりを両立、祭りのときは取り外される

玄関の土間部分にちょっと腰掛でき、来訪者とおしゃべりできる（写真：④）



集いをうながす

☞ 続き間 縁側
土間 濡れ縁

住まいでの人と人の交流には、子育てや趣味、地域のボランティア活動等を通じて知り合った友人や仲間、学生時代から付き合いの続く友人、職場の同僚等との交流があります。最近ではホームパーティやガーデンパーティ等、住まいの身近なところで、家族以外の人々と集う機会が増えてきました。

住まいのなかに人が集いやすい場を形成するためには、ゆとりがあり融通性の高いスペースや自然を感じられる心地よいスペースが有効です。「続き間」（広間）は間仕切りを上手く使い、大人数から小人数の集まりまで色々な目的に柔軟に対応できます。かつての日本の住まいには、この続き間と戸外（庭）のあいだに、板

敷きの「縁側」が設けられていました。「縁側」は通路以外に広間の補助的なスペースとして使えるとともに、戸外の自然環境をうまく引き込んで心地よい室内環境をつくりだします。

また、創作やアウトドア等の趣味の活動を家族以外の人々が参加して一緒に実践できる場として、室内と戸外とのあいだに「土間」を、また、戸外に「濡れ縁」（デッキ）等を設けることも有効です。これらの境界部分の建具を全開放できるようにする、床の素材を工夫すること等により、活動の楽しさは膨らみ、新たな展開にもつながることでしょう。



庭に面する明るい縁側状の広間で、友人家族を迎えて、子どもと大人が食事をともに楽しむ（写真：①）

集合住宅の共用庭にテーブル等が置かれ、入居者同士や家族が使える場を形成している（写真：③）



板の間と畳の間の続き間はホームパーティや趣味等多用途に利用できる（写真：①）



部屋と庭のあいだの土間スペースは、人と人との集いの中心の場となる（写真：①）



屋外のウッドデッキで、友人らとともに、自然を感じながら食事を楽しむ（写真：①）

2.1 人と人との関係を守り育てる

家族が見守り合い、成長する 家族の集いをうながす

☞ 畳(和室) 板の間
土間 囲炉裏

家族が住まいの中で集い過ごす方法は、家族の構成や年齢によって様々です。かつての日本の住まいにみられた「畳」「板の間」「土間」「囲炉裏」等は、現代にも取り入れることができ、家族の集いをいざなうでしょう。

「畳」は弾力性や保温性を備え、空気の調湿作用をもっています。畳の間は、乳幼児を安心して休ませることができるほか、年齢を問わずリラックスできて寛げる場にもなり、また、ダイニングやキッチンに近い場所に設けると、家族が集うスペースの中心ともなります。

「板の間」は木の柔らかな触感や温かみが感じられ、椅子座だけでなく床座の生活にも利用できます。小さな子どもの遊びにも適しますので、子どもを中心にし

た家族の集いをうながします。

「土間」は趣味を楽しめる以外に、戸外に面する開放的で気持ちのよいしつらえにして、第二のダイニングや子どもの遊びに利用することも考えられます。

「囲炉裏」は採暖や調理に使われ、かつては家族がその周りを囲んで団らんする生活が行われていました。今日、囲炉裏が設けられることは少なくなりましたが、火のある場を住まいの中心とする考え方は大切にされ、薪ストーブ等の普及が進み、集いの場を演出しています。

このように空間構成にマッチした床の素材や暖房機器の採用等により、家族が集う場に相応しい空間づくりにつながるものと考えられます。



温かみのある無垢材の板の間と畳の間。子どもの遊び、お年寄りの寛ぎ等、様々な使える（写真：①）

玄関から続く土間スペース。家族が集まり、遊びや趣味等を楽しむ（写真：①）



食卓に炉を設けている。家族が火を囲み食事を楽しむことを重視している（写真：①）

小上がりの畳の間をダイニング・キッチンの近くに配置。子どもを休ませたり、家族がくつろぎやすい（写真：①）



家族の気配や様子をを感じる

襖 引戸 障子

続き間 吹抜け 畳(和室)

かつての日本の住まいでは、内部に横引式の「襖」「引戸」「障子」等の建具が使われてきました。洋風化・個室化が進んで和室が減少したことに伴い、現代の住まいでは回転式のドアを用いることが一般的になっています。

横引式の建具は、回転式のドアに比べて開放時に通行の邪魔にならず、開放寸法を自由に調整できます。隣の部屋の様子を視覚的に遮りたいときには閉鎖したり開放寸法を小さくし、生活の様子を窺い知りたいときには開放寸法を大きくする等、使い分けができます。こうした家族同士が日常的にお互いのことを気に留める暮らしを重ねて、他者との関係を配慮する気持ちが育まれることにつながるかもしれません。

今日、引戸や障子のデザインは工夫されたものが見られ、洋室に使用してもとくに不釣り合いになることはありません。とくに障子を用い、木の棧と紙が織りなす意匠の美しさにより、室内の雰囲気をも柔かく洗練したものにする事例も多く見られます。

最近では、個室よりも家族の共用スペースを重視した、連続性・一体性の高い間取りも見られるようになってきました。家族が時間や空間を共有して、一緒に過ごすことを大切にするライフスタイルの現れと言えるでしょう。襖、引戸等の柔らかい間仕切りを上手く使い、そうしたライフスタイルに相応しい場をつくることもできるでしょう。



吹抜けを介して、1階と2階にいる家族が、お互いの様子をうかがい、声掛けする（写真：①）

キッチンから見渡したリビング。奥の土間と格子の引戸で仕切り、利用に応じて開閉（写真：①）



ダイニングと連続する畳の間、開放的なつくりで食事や寛ぎの様子が住宅全体に拡がる（写真：①）

キッチンで食事の支度をしながら、デッキや室内で遊ぶ子どもの様子が見られて安心（写真：①）



2.2 日々の暮らしを楽しむ

暮らしのなかで、楽しみや豊かさを味わう

和の意匠を味わう

☞ 瓦屋根 漆喰壁 板壁 畳(和室)
真壁 格子 障子 襖 引戸
大黒柱 自然素材・地域産材

日本の住まいは、懐かしさ、落ち着き、愛着等を感じることで自然の材料が各所に用いられ、その素材を活かした意匠が施されていました。そうした素材や意匠は視覚的な豊かさを与えてくれるだけでなく、機能上も意味があり、継承されて使われてきました。

「瓦屋根」「漆喰壁」「板壁」は日本の住まいの代表的な外装材で、落ち着いた深みのある印象を与えるとともに、日本の多雨・高温な気候風土に対して建物を保護する機能をもっています。

室内は「和室」で、柱を表に見せ壁に漆喰塗り等を施す「真壁」を基本とし、建具や床材・天井材には木や竹、い草・わら等の「自然素材」が多く用いられ、柔らか

で優しい質感を感じられるとともに、調湿等の効果もあると考えられています。これらの素材は耐久性が高いことに加え、入手し易く補修も比較的容易です。

現代の住まいでは、伝統的な素材や意匠のみで構成するのではなく、新しい建材や工法を組み合わせることが考えられます。椅子座の生活や大壁のしつらえと、自然素材やきめ細かさに配慮された和の意匠を工夫して、バランスよく組み合わせることにより、現代のライフスタイルにもよく合い、材料や建材の生産・流通状況にも対応した、新しい洗練された意匠を創出することができるでしょう。



畳、雪見障子、襖、土壁(聚楽壁)。小さなスペースでも和の意匠が活かされ、居心地がよい(写真：①)



太い象徴的な柱を据えて畳の間を2方に開放。材のプロポーションに配慮され、板の間とも調和し、空間のメリハリを感じさせる(写真：①)

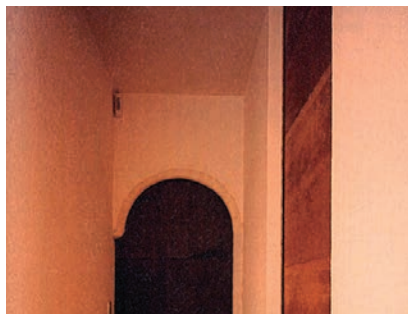
漆喰壁、瓦屋根の伝統的な住宅。落ち着きを感じさせる



和室と連続する庭。プロポーションの美しさと陰影による深みを感じさせる(写真：⑤)



かとうぐち(火灯口)と和紙を用いた壁装。温かさ、柔らかさを感じさせる(写真：①)



趣味を実践し楽しむ

近年の余暇時間の拡大、所得の増加、情報化等とともに、住まいの中でも趣味を実践するライフスタイルが重視されています。読書、絵画、茶道、生花、料理、音楽、健康増進、DIY、ペット、園芸等、住宅のなかで実践される趣味には様々なものがあります。

趣味を十分に行うには、各趣味に応じて、汚れにくさ、吸音性や遮音性、座れる床、戸外とのつながり等を備えたスペースが必要になります。けれども、例えば茶室のように、使い方が特定の趣味に限定される部屋を用意できるケースは少ないのが実情です。そのため先人の試みを活かして、「和室」「土間」といった普段は家族共用の場でありながら、必要時に別の目的に利用できる融通性・転用性の高いしつらえのスペースを確保することが現実的と言えるでしょう。これらのスペースと隣室や庭とのつながり・動線等に留意して、複数の用途に使いやすい場を創出する工夫が大切となるでしょう。



床面に堅牢な材料を用いた土間は、戸外の趣味生活にも対応しやすい(写真:①)

押入の上部スペースに神棚を設置。床の間とともに飾りの要素となっている(写真:①)

思い出を受け入れ、心を落ち着かせる

かつての日本の多くの住まいには、「仏壇」「神棚」といった礼拝の場が設けられていました。これらは単に信仰や宗教上の用具ということだけでなく、昔は訪問客がまず仏壇に挨拶する習慣があったように、普段の生活のなかで礼節を知り学ぶ場としての意味もありました。

現代の生活習慣は昔とは著しく変わりましたが、現代でも、礼節を重んじる機会、祖先のことを思い敬う機会等は、自己の心情を顧み持ちが落ち着くとともに家族のつながりを再確認できる面もあるでしょう。

洋風化し、広さの限られた住まいにおいて、「仏壇」「神棚」のスペースを確保し、現代の意匠や家具等と調和させるのは難しい面もあります。しかし、例えば、マンションでも飾り付けのコーナーと一体にする、建具等で仕切れるようにする、将来のスペースを用意しておく(当面収納に用いる)等の工夫により、そうした場を形成し、継承していく方法があると考えられます。



畳縁のない半畳を敷き込んだ和室。ニュートラルな雰囲気、様々な使い方に对应させやすい(写真:①)

リビングに連続する和室に仏壇を設置。床の間のとなりに納められている(写真:①)



2.2 日々の暮らしを楽しむ

自然の変化やその風合いを感じとる 自然の素材を味わい、継承する

☞ 瓦屋根 土壁 漆喰壁 板壁
襖 引戸 障子 畳(和室)
板の間 自然素材・地域産材

かつての日本の住まいは、木、紙、土、石、竹等の自然の材料を基本としてつくられていました。それらの多くは地域で採取され、地場の職人により生産・加工され、経年時に修繕が施され、使い続けられてきました。

自然の材料は豊かな素材感や風合いを備えています。また、加工・製作にも工夫が施され、美しい造形が多くあります。それらが身近にあることは、人の感性の繊細さや感受性、愛着を育む効果があると言えるでしょう。

また、自然の材料は手入れに特殊な技術が必要としないものが多く、その方法は先代から伝えられて住み

手自らが手入れを担っていました。それゆえに、住み手が住まいに対し愛着を持ち大事にしてきたという面もあるでしょう。

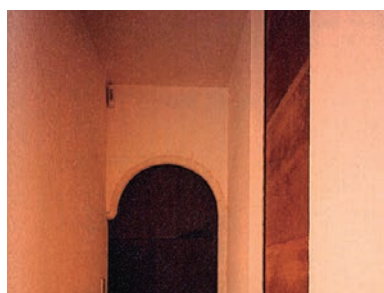
現代の住まいにおいても、「瓦屋根」、「土壁」、「漆喰壁」、「板壁」「襖・引戸」「障子」等の木製建具、「畳」「板の間」といった自然の材料やそれを用いてつくられる建材を取り入れることは、特別なことではありません。とくに自然素材への関心は最近高まってきています。自然の材料を用いることは、コストに多少の配慮が必要になることがありますが、暮らしの豊かさだけでなく長寿命で愛着のある住宅づくりやそのための地場の技術の保全にも奏功すると言えるでしょう。



障子の組子と和紙のテクスチャー、プロポーションを味わう



瓦屋根、漆喰壁の素材の質感、対比を楽しむ



和紙を用いた壁装の柔らかみのある素材感を味わう (写真：①)

外壁下見板張りの質感を味わう。経年により愛着が育まれる (写真：①)



畳、襖、障子、漆喰塗り、木の柱・差し鴨居の自然の素材で構成した和室。清潔で洗練された印象 (写真：①)



四季の変化を感じ、楽しむ

日本の四季の変化は、私たちの日常生活に潤いや豊かさをもたらしてくれます。かつての日本の住まいでは、戸外の植栽や木々等が季節とともに変わっていく様を、室内からも感じ、楽しむことが、大切にされてきました。

庭の各所には花木等「植栽」がきめ細かく施され、「前庭」には季節感を感じるシンボルツリー等が植えられ、訪れる人を迎えました。

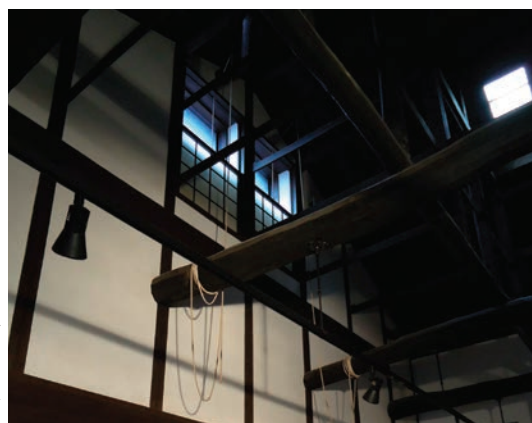
戸外と室内の間の境界には、庭の配置や植栽を考慮して「掃き出し窓」「地窓」等が適所に設けられ、戸外の自然の景観が、室内にいながら様々な場において望まれました。

また、敷地条件に応じ、「坪庭・中庭」を計画して室内と一体性の高い戸外空間をつくり、室内環境を少しでも心地よいものにする工夫が講じられてきました。



庭の緑への眺めを意図した大きな
め殺し開口（写真：⑤）

伝統的な民家の
通り二ツ上部に設け
られた高窓。やわ
らかい光が採り入
れられる



キッチン・ダイニ
ングに面する大き
な掃き出し開口を
通して、庭の緑と
季節感を日々感じ
られる（写真：①）

リビングの掃き出
し窓に紙障子を設
けて、日射をやわ
らかい光に調整す
る（写真：①）



光を採り入れる、制御する

かつての住まいには、腰壁のある窓以外に、掃き出し窓、欄間窓、高窓等様々な種類の窓が設けられていました。いずれも採光に効果がありますが、とくに町屋等に設けられていた「高窓」は、室の奥まで光を導き、光の均一性を高める効果があります。

地面で反射した光を軒裏でさらに反射させて光を導くこと、白漆喰等の反射率の高い室内仕上げとすることも、室の奥まで光を導き入れ、明るさを高める効果があります。

これらは室内の明るさの確保に寄与しますが、単に明るさを確保するだけでなく、陰影が生活に情趣をもたらすこともあります。「障子」「すだれ」等を窓に組み合わせることで、採り入れる光の量や質を調整し、少し暗くしたり柔かい光にすることもできます。また、プライバシーの確保にも役立てることが出来ます。

2.3 心地よく環境にやさしい生活を支える

夏の快適、涼やかな生活に寄与する 自然の風を取込み涼感を得る

☞ 掃出し窓 高窓・天窗 地窓
越屋根 格子 続き間 吹抜け
襖 引戸 欄間 坪庭・中庭

蒸し暑いモンスーン気候のわが国では、「夏を旨にすべし」と言われてきたように、住まいに自然の風を取り入れて涼感を得ることが、古来より重視されてきました。

風を取り入れるためには、風の流入口と流出口となる開口部を壁に設けることが必要です。夏や春・秋における敷地の風特性を読み取り、卓越風が当たる壁面に「掃き出し窓」等の大きな開口部や、全開放できる開口部を設けることが効果的です。室内に滞留する空気は温められて上昇しますので、開放できる「高窓」を設けてそこから排出するとともに、室内の低い位置に「地窓」を設けて外部空気を取り入れ、室内空気の循環を

促進することも有効です。開口部の防犯性やプライバシーを高めるためには、大きさを工夫したり、「格子」等を付属させることで対応できます。

室内の通風性や空気循環性を高めるために、平面的には「続き間」を、断面的には「吹抜け」を設けて、連続性・一体性の高い間取りにするとともに、部屋と部屋の間を「引戸」や「欄間」で、開放しやすくしておくことも大切と言えます。

狭小な敷地の場合、「坪庭」や「中庭」を設け、日中日陰となる庭を通じて、温度の上がらない外気を室内に取り入れて、涼感を得る方法もあります。

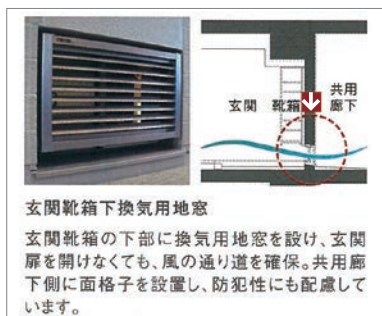


リビングに面する引込み形式の全開放できる掃き出し窓。対面にも窓を設けて室内の風通しをよくする（写真：①）



吹抜けと1階、2階に大きな窓を設置。外部風を取り込み、住宅内での空気の動きをうながす

集合住宅の住戸の玄関収納下の地窓。プライバシー、防犯性に配慮して通風を確保（写真：③）



地窓と一般窓を組合せ、地窓には格子を設置。通風、プライバシーの確保とともに防犯や転落防止にも配慮（写真：⑦）



日射を遮り室内への流入を抑える

☞ 深い軒 日除け(すだれ・よしず)
窓庇 障子 植栽

夏や春・秋の暑い日に、住宅内への太陽熱の過度な流入を抑制し、冷房に頼らないでも心地よい室内環境を保つために、とくに日射遮蔽は重要となります。

日本の住まいに古くから用いられた「深い軒」は、太陽高度が高くなる南からの日射を遮るのにとくに効果があります。また、太陽高度の低い西・東からの日射を遮るためには、窓の内外に遮蔽物を設けることが有効です。最近では室内にカーテンやブラインド等がよく設けられますが、窓の外側に設置する方が日射を遮る効果は高く、古くからの「すだれ・よしず」はとて有効です。安価で取り扱いも簡便なので、窓庇や軒裏等に取付け用のフックを設けるとよいでしょう。

これらは日射を取り入れたい冬等には、取り外しできます。最近の外付けのブラインド等も、「すだれ」同様、遮蔽効果の高い建材です。

建物周囲の「植栽」に気を配ることも大切です。落葉樹を窓の位置と方位を意識して植樹する、照り返しを抑制するために建物に近い地表面を芝や土で覆うこと等も、日射を遮る工夫の一例です。

また、屋根や外壁は、日射により温度が上がると室内側への放熱が生じるので、それを抑制するために、瓦や板壁を用いた場合でも下地に断熱層、通気層を設ける対策を講じることが望まれます。



室内にすだれを吊るし、日射の流入を抑制。見た目にも涼感と風情が感じられる (写真:①)



軒庇による日射遮蔽。太陽高度の高い南面では単独で使える手法 (写真:②)

紙障子で日射を遮るとともに視線を制御する



軒先から吊るした紐につる性植物を這わせた緑のカーテン (写真:⑦)



窓庇の先にフック状の金物を取り付け、すだれ等を設けられるようにする (写真:②)



2.3 心地よく環境にやさしい生活を支える

冬の快適、あたたかな生活に寄与する 熱移動を調節し寒さを緩和する

☞ 縁側 雨戸 障子

住宅の断熱性をできるだけ高めて、冬に室内から外に熱が逃げないようにすることは、あたたかく暖房エネルギー消費の少ない住宅づくりを目指すときの基本となる考え方のひとつです。かつての日本の住まいは、断熱性の面では劣っていましたが、室内と屋外の境界部分に、断熱性の向上に寄与しうる要素が幾つか使われていました。

「縁側」は主室と戸外の間に設けられた幅3尺から6尺程度の板の間で、縁側と和室の間は通常障子で仕切られて、熱的な緩衝空間として機能しています。主室を直接外面させず縁側を設けることにより、厳しい戸外環境の影響を小さくし、主室の環境を保つ効果が期

待されます。現代のサンルーム等は環境調整空間の新しい形と言えます。

また、雨戸、網戸、ガラス戸や障子といった様々な外部建具を組み合わせ、季節や地域の気候特性に応じて使い分けることも大切です。戸外の寒暖、風雨、昼夜等の変化に応じて、住まい手自らが開放・閉鎖を使い分け、室内環境の維持・形成に役立てることが出来ます。「雨戸」は風雨から開口部を守ること以外に、防犯、遮音、断熱にも役立てることが出来ます。冬の戸外の寒さに対しては、戸の素材や戸と枠の取り合い等を工夫することにより、断熱性を高めて寒さを和らげることも可能です。



縁側は部屋と屋外の緩衝空間となり、熱の移動を調節する（写真：②）



外から雨戸、網戸、ガラス戸と障子を複合。季節や気候特性に応じて様々な建具を組み合わせることが大切（写真：⑦）

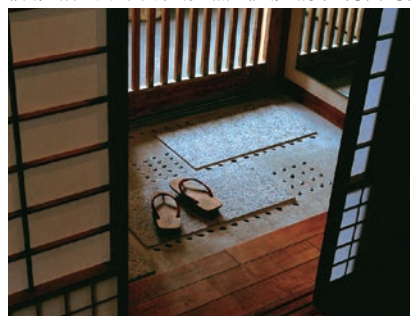
縁側の熱調節機能をも高めるために、縁側と戸外、主室のあいだの建具のつくりを工夫する（写真：④）



伝統的な民家の雨戸。風雨から開口部を守る戸であるが、防犯、遮音、断熱の機能をもち得る



集合住宅の居室とバルコニーのあいだに土間風の中間領域を設け、建具で仕切り熱の移動を調節（写真：①）



日射熱を集め蓄えて暖かくする

☞ 掃き出し窓 土間 土壁
自然素材・地域産材

冬に太陽からの日射量が多い地域では、日中の太陽熱を室内に取り入れて暖房の効果を得ることができます。暖房効果は、太陽熱を室内に多く取り入れて（集熱）、熱を蓄えて夜間等に持ち越す（蓄熱）ことで得られますが、屋根・壁・床や開口部等の断熱性を高めて熱が室内から外に逃げないようにすることが必要です。

かつての日本の住まいから、このうち集熱と蓄熱に効果のある手法を見出すことができます。

「掃き出し窓」等の大きな開口を設ける住宅のつくりは、集熱に適しています。「掃き出し窓」を南面に連続

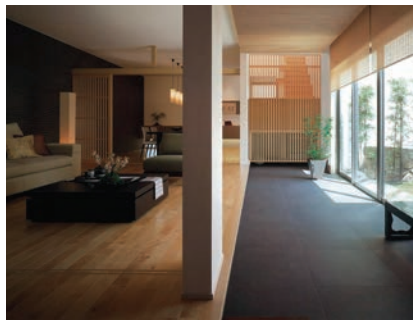
して設けることにより、集熱の効果が上がります。窓の上にある程度深い軒があっても、冬期は太陽高度が低いので、集熱が損なわれることは少ないと言えます。

蓄熱の効果を得るためには、土・石・陶器質タイル・瓦・漆喰等、熱容量が大きな材料を室内に用いることが必要です。「土壁」を外周壁や間仕切り壁に用い、漆喰塗り仕上げ等とすることも蓄熱効果を高めるために有効です。また、「土間」は熱容量が大きな材料を用いやすい床です。南玄関の土間床を大きく取りリビングにつながるプラン等も考えられます。



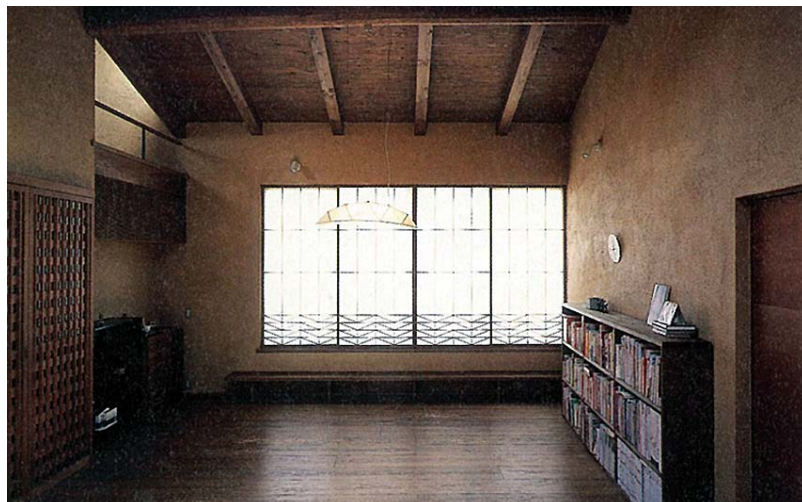
南面の掃き出し窓と窓際の土間。土間床のコンクリート等は蓄熱性が高い

南面の連続する掃き出し窓と窓際の土間。大きな開口は太陽熱を取得する効果が高い（写真：②）



南面の連続する掃き出し窓と石張りの床。石やタイル等は蓄熱性が高い（写真：②）

土壁や漆喰塗り仕上げの壁装。風合いがよいことに加え、土壁は蓄熱にも効果がある（写真：①）



2.4 外的環境から建物を保護する

家をいためる自然の力を和らげる 風雨から建物を守る

年間降水量が世界平均の2倍で、台風の襲来が多いわが国では、強風や強雨、多雨から建物を守る工夫が古くから講じられてきました。

雨の影響を最も受ける屋根は、「勾配屋根」とし、「深い軒」を出すことが重要です。勾配屋根は、雨水を速やかに建物の外に排水するための合理的な形態です。軒は、雨を外壁面に当たりにくくして建物を雨から守ります。

屋根を葺く「瓦」は、紫外線等にも強い耐久性の高い材料であることに加え、瓦の裏面に空気層があるこ

とで、雨水や湿気が入った場合でも、その排水や乾燥をうながします。

外壁には、雨掛かりの影響を小さくするために、土壁の外側に「板壁」を設ける、防水性の高い「漆喰壁」とする等、土壁を保護する工夫が一般的に行われました。雨の多い高知等で見られる外壁の水切り瓦は、壁を伝う雨水をこまめに切ることで、外壁に影響する雨水の量を軽減する工夫です。

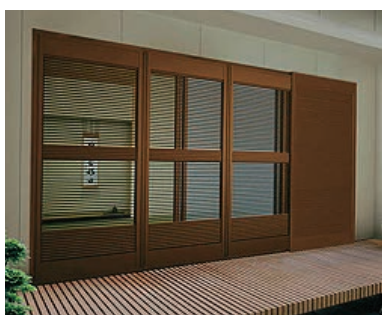
開口部からの雨水浸入を防止する対策も重要で「窓庇」や「雨戸」を設けることも効果があります。(次頁へ)



妻壁の窓に付属する窓庇。開口部を雨から守るとともに、日射遮蔽の機能ももつ (写真：①)



富山・砺波平野の防風機能を備えた屋敷林



通風機能を備えた雨戸。ルーバーは可動し、通風・採光・視線を制御する (写真：②)



耐久性の高い瓦の勾配屋根。降雨を建物の外に速やかに排水する

土壁を保護する下見板を付加した外壁。雨掛かりの影響を軽減する



☞ 勾配屋根 瓦屋根 深い軒
板壁 漆喰壁 窓庇 雨戸
植栽 建物配置

台風の常襲地や季節風の強い地域等では、建物周囲に樹木を配する等、「植栽」により風や雨の影響を緩和する工夫もみられます。東北の「イグネ」、富山県砺波地方の「カイニョ」等の屋敷林等の例があります。

これらに掲げる知恵や工夫に共通するのは、自然の大きな力に対して謙虚に向き合い、逆らわず、無理をせず、力を和らげる考え方です。建築技術や材料が発達した現代でも十分に有効な方法であり、積極的に取り入れることが望まれます。

湿気から建物を守る

高温多湿なわが国では、主体構造の土台・柱・梁等の木材を腐らせないようにすることが、重視されてきました。

「真壁」は構造の柱や梁を表に見せて、その内法を壁仕上げとする構法です。構造材が常に空気に触れているので乾燥しやすく、耐久性に優れ、改修もしやすい工法です。換気性能の高い床下や小屋のづくりは、床組や小屋組の木材の乾燥に効果があります。また、「高窓」は室内で暖められた空気の排出に有効です。「畳」(伝統的な製法による稲わら畳床)に用いられるい草・稲わらや内壁仕上げの左官材料の多くは吸放湿性が高く、室内の湿気や水分を吸収・放出するので、結露防止等の効果が得られます。



越屋根に設けた開口を開放して、暖められた室内空気を排出する (写真:①)



敷地周囲の生垣により強風から建物を守る (鹿児島)



外壁を流れる水を切る水切り瓦 (高知)

小屋裏現しで天井を高く開放的にし、室内の空気循環をうながす (写真:⑥)



畳、漆喰塗等の自然素材を利用し、吸放湿性を高める (写真:①)

